

# 週刊新潮

11月26日雪待月増大号

特別  
定価 420円

ワイド  
特集

ふとびき者ほどよく眠る



45

# 川島なお美「をがん放置思想の布教に利用した罪深き」近藤誠

「川島なお美さんはもともと「生きたら」……。『文藝春秋』11月号で独自の『高説を垂れたのは、「がんは放置しろ」の「がんもどき」理論でお馴染みの近藤誠医師(67)である。有名人のがん死を、近藤誠の布教に利用する手口は相変わらず巧妙だが、昨今、彼は活字以外のフロンティアを開拓。自らが監修する漫画「医者を見たら死神と思え」ビッグコミック連載)でも、危険思想の啓発活動を展開中なのだ。一体どっちが死神なのか……」



漫画の世界でも布教に余念がない

置「理論の正しさを主張してきた。証明されていない仮説を、あたかも事実のように断定し、がん患者を死に至る。放置ブレイクに引き摺り込もうとしているのだ。そして今般、54歳の若さで壮絶な最期を遂げた、川島なお美もフイーチャー。彼女が一昨年9月、セカンドオペニオンを求めて、自分の元を訪ねてきたことを明かした。その肝内胆管がんについて、2ヶ月ほどの大きさを、転移はなかったとしたうえで、こう言うのだ。

「川島さんは医師から余命一年を宣告されていたが、僕は彼女にこうアドバイスしました。「このまま放っておいでも一年で死ぬことはありませぬ。一年以内に死ぬとしたら手術や抗がん剤治療を受けた場合だけです」結局、川島は発見から5カ月後の昨年1月に手術を受け、その後、再発。今年9月、還らぬ人となった。

## 医学的にナンセンス

この主張に対し、肝胆脾がんの専門医で、かつて『週刊文春』誌上で近藤医師と対談したこともある大場大

・東京オンコロジッククリニック院長はこう喝破する。「肝内胆管がんは、傍らに門脈や動脈などの血管も近接するため、大きなサイズで見えられると他臓器へ転移しやすい。根治を目指すためにはリンパや門脈の流れを意識した、専門性の高い手術が必要となります。患部だけをラジオ波で焼いても根本的解決にはならず、手術で治せる患者に行うのはナンセンス。近藤氏の持ち出した論文は、根治が指せる患者が対象ではなく、再発ケースや転移があつて手術の候補にならない患者に対するデータなのです。そこを混同させてはいけません」

「がんの切除手術や抗がん剤治療をしたばかりに、死期を早めた」と、後出しジャンケン。の如く、「がん放

上という予測結果になる。転移のない2ヶ月程度の早期発見は極めて稀でラッキーだったのに、近藤氏を訪ねたばかりに間違つた情報に

振り回され、不幸な転帰を招いた可能性は高い。正しく漏れない説明責任を果たさなかつた彼の罪は極めて重いのと思います」(同)

とさせる編成なのだが、「実は、隠しようのない問題」が、立ちほだかつているのです」とは、さるTBS関係者である。それは、

## 8 「魔装斗vs.山本KID」でTBSの心配は教育的配慮のクレーム爆発

あれこれと言われながらも、大晦日の視聴率争いは毎年、NHK紅白のひとり勝ち。裏番組をぶつける民放は討死が続いているが、今年もTBSがタレントに転じた魔装斗(36)を一夜限定で復帰させ、山本KID(38)と対戦させる「目玉企画」をぶち上げた。が、すでにトラブルの種は露わらなっている……。

判定勝ちを収め、瞬間最高視聴率も31.6%をマークしたのです。今回、11年ぶりに、伝説の「バラエティ特番」復活を目指すわけだ。



11年ぶりの対戦(下は現在のKID)

「KIDの体の至る所に彫られている刺青です。以前は、サポーターなどで何とか隠せる規模でしたが、その後広がるばかりで、今や完全にファッショントウの域を超えている。それが試合で晒されるため、「CSならばまだしも、地上波のゴールデンでお茶の間に流すのはいかがなものか」との声が上がっているのです」

## 「乱暴な手法」

別の民放幹部が明かす。「格闘技番組は、2時間特番ドラマに比べてはるかに安上がりです。今回も、2人のギャラを含めてトータ

スポーツ紙の格闘技担当記者が言う。「両者の対戦は2004年の大晦日、大阪ドームでの「K-1 PREMIUM Dynamite II」に廻ります。互いにダウンを奪い合う激闘の末、最後は魔装斗が

一翔の防衛戦中継と合わせ、特番を「KYOKUGEN 2015」と銘打ち、09年に引退した魔装斗を引っ張り出してきたのです」(同)

格闘技番組が乱立している、かつての年の瀬を彷彿

と約12%です。また、17人中10人は、手術を受けた後の肝臓のみに再発したケースが多く含まれていて母集団にバイアスがあります。そのようなやこしいデータをあえて探し出してこなくとも、川島さんのケースも相当する肝内胆管がんを対象とした外科手術の有効性を示す客観的データを見れば、彼の問題は明らか。川島さんは『文藝春秋』の記事によると、発見当初はステージII程度までだったと考えられる。東大病院などが中心となつたオールジャパンの手術治療成績が最近、まとめて報告されました。結果、リンパ節転移がない場合、ステージI(13例)の5年生存率は100%、II(114例)で約70%、III(115例)で約50%です」